



第5回 共和病院認知症勉強会を終えて

老年科部長
河野 和彦

さる2月16日に大府市役所多目的ホールで、認知症勉強会を開催しました。この勉強会は、おおよそ10カ月周期で行っており、毎回参加者が増えておりますので300人が参加できるホールを確保しました。私が「認知症ブログ」で紹介してきましたように、共和病院内科外来で初診する患者様の中でレビー小体型認知症（以下DLB）が際立った増加を示しています。DLBは転倒、誤嚥をしやすい、一部の患者では進行が早い恐ろしい病気です。診断、治療、介護ともにアルツハイマー型よりはるかに難しく、今回は嚥下機能のケアについても保原内科医師、早川管理栄養士、高木言語聴覚士、加藤理事長の豪華な布陣による講義に加えて私がDLBの治療について70分話をしました。

NHK教育テレビでも取り上げられたように、認知症を専門医に紹介してくれないことが多く、診断や治療に難渋しているDLBを当院に導いてくれるのは、ほとんどがケアマネジャーさんたちです。私は3年前に知立市でケアマネジャー対象にDLBを講義したあと、月間2-3人だっ

たDLBが14人に急増したことを忘れられません。医師でなくても、いや医師よりもケアマネジャーに講演したほうが、患者を早く発見できることを確認したのです。いくら医師会に認知症講演への参加を呼びかけても集まるのは10%くらいです。ケアマネジャーさんに問題症例を導いていただき、サクサク治してゆくのが効率的です。

今回、アンケートに「難しすぎる」と批判されることを覚悟の上で、日本でもっともレベルの高い講演を行いました。開催後、参加者からのアンケート（回答率70.3%）を見ると、大変満足92、満足54、普通3、不満0という圧倒的な好評を得ることができ予想以上の手ごたえでした。私の信頼するKさんはまさに「達人ケアマネ」であり、DLBを見つけては私に事前通達し、相談しに来てくれるほどです。15年後には認知症の患者爆発がおきます。そのときに備えて私は職人のように大勢の患者様を治しています。今ある問題を是正するため、皆さんの協力のもとに草の根運動を展開し、日本の後期高齢者医療の是正を目指したいと思います。またお会いしましょう！



日本医療機能評価機構
認定シンボルマーク

TOPICS・EVENT

第5回 共和病院認知症勉強会に参加して

医療福祉課 平野 みずえ

今回の認知症勉強会は『レビー小体型認知症と合併症を考える』と題し、二部構成で行いました。第一部は①認知症患者の栄養管理、②認知症患者の食事の工夫、③誤嚥防止のポイント、④医学的栄養補給法の4つの視点から内科医師・管理栄養士・言語聴覚士より医療・介護などの現場で実践できるような内容でした。

第二部では認知症勉強会のテーマに沿って、近年注目されているレビー小体型認知症について河野医師による講演があり、その中でレビー小体型認知症はアルツハイマー型認知症よりも発症率が高いという話や、他の認知症よりもせん妄が合併して起こりやすいこと、また、風邪薬などを飲んで寝てしまうなど、薬の効果が通常の人よりも敏感な薬剤過敏性のため内服薬の調整が難しいことなど、90分を超える講演ではありましたが、和やかな雰囲気でもとても充実したものとなりました。

今回は、これまでの勉強会をはるかに超える300名近い医療機関・介護保険関係の施設や事業所の方が集まりました。寒い日であったにもかかわらずホールは熱気に包まれ、講演が終了した後も、演者のもとへ熱心に質問をしている方の姿も見られました。



また、参加者アンケートでは、第一部の講演について、「自分の職場に持ち帰って実践することができる」という意見や、「とても参考になった」との意見が多くみられ、じかに認知症患者様と関わっている方々にとってはわかりやすく実践的な内容であったようです。

第二部の河野医師の講演では、「とても勉強になった」「もっと他の認知症の話も聞きたい」という意見も多く聞かれ、今後の勉強会に対する期待も高いことが分かりました。

私はこの認知症勉強会にスタッフとして参加して、回数を重ねるごとに参加人数が増えていることを実感しています。TVや新聞などにも大きく取り上げられるようになり認知症への関心が高まっていることで、ケアマネージャーや介護スタッフとして多くの方が関わっているのだと思います。

そのような中で、今回の勉強会が認知症に対する理解を深めるひとつのきっかけとなり、患者様やご家族への支援がよりよいものとなるよう、今後につなげていきたいと思っております。

第1回 看護部研究発表会を終えて

看護部長 松下 直美

看護部では、これまで年に1回、院内の職員のみで看護研究発表会をしてきました。その中から院外の学会発表をする機会も増えてきました。そこで、今年から今まで院内で行ってきた研究発表会に院外の方もお招きしながら行いたいと提案したところ、看護部以外の部署からも発表希望がありました。

初の試みですので、準備段階から不安がありましたが、多職種の方が、「大丈夫??」と何度となく声を掛けてくれました。「看板はうちの親父に毛筆で書いてもらっておくよ」「案内用の貼紙はうちの部署が協力できるわ」「飲み物の手配はうちの部署がやるよ」「パワーポイントやマイクの事は任せといて」等、今さらながら、看護部は周りの多職種の方達に支えられているという事を実感しながら準備は完了しました。

さて当日、発表に先立ち院長の講演がありました。「患者から学ぶ看護」というタイトルの内容には、院長が当院で医療を行ってきた優しい思いに溢れていました。次の研究発表は看護師3題、薬剤師2題、作業療法士1題でした。他職種の発表では、専門用語が分かりやすいように発表途中で説明があり、みんなで理解できるように配慮した内容でした。また、最後の乳癌患者様を看取った看護師からの発表では、質疑応答の中で、看取りに対する思いについて多く発言があり、時間が足りなくなるほどでした。当初の予想参加人数は80名でしたが、終わってみれば113名(院外36名、院内77名)の参加者でした。今回、最も良かったと思ったことは、この発表を通じて、自分の病棟の事のみでなく他病棟、他部署の取り組みがよくわかった事。それから、お招きした 藤田保健衛生大学 精神看護学准教授 近藤千春様からの確かな講評をしていただけた事でした。



院外から参加された方からのアンケートでは、「職域を越えた一体感を感じた」という感想を多く頂きました。看護実践については、日々努力している私達ですが、論文作成については不慣れな部分も多くあります。実践したことをしっかり形にして残し、次のケアのステップに繋がられるように、これからもみんなで研究論文作成の勉強をしていきたいと思います。

発表会プログラム

- ◆開会の辞— 看護部長 松下 直美
- ◆講演——「患者から学ぶ看護」
院長 榎本 和
- ◆研究発表
 - 第1題：番号札による呼出し方法を老年科外来に導入して—
—導入後のアンケート調査より—
外来看護師 石那田 華代子
 - 第2題：当院におけるCP換算の5年間(平成15～19年)の推移
—平成15年から3年間の調査後さらに追跡調査した報告—
薬剤師 新美 詠彦
 - 第3題：健康面に焦点を当てた看護の意義
～統合失調症患者の隔離処遇から退院までのプロセスを通して～
看護師 濱島 明美
 - 第4題：ランソプラゾール(タケプロンR)による副作用の1例報告
—タケプロンRにより重度の高脂血症をきたした症例—
薬剤師 矢田 裕美子
 - 第5題：医療と地域を結ぶ外来個人作業療法
作業療法士 梶 佳稔
 - 第6題：乳がんターミナル期患者の看取りについて
—本人の望む生活とはなにか、を話し合って—
看護師 熊谷 貴子
- ◆講評—— 藤田保健衛生大学 精神看護学准教授 近藤千春氏
- ◆閉会の辞— 理事長 加藤 仁

編集後記



暖かい春の陽射しと桜並木に、自然と気持ちが和らぐ今日この頃です。新年度になり、新しい旅立ち、新生活の始まりで、気持ちも新たになる時期でもあります。皆さんは、どのようにこの時期を過ごしていらっしゃいますか？

当院にも4月から新入職員が入り新しい仲間が増え

がんばってます
おじさんず！
おばさんず！

施設課って何やってるところ？一言で言うと院内の"何でも屋さん"だと思います。たとえば、清掃、設備機器のメンテ、樹木の剪定やマイクロバスの運転等々です。これらを支える戦士が、おじさんず3とおばさんず2です。平均年齢50歳代？のしぐい面々で日々院内の戦場で奮闘しています。スタッフを紹介します。手前から、共和病院最古参の森川、笑顔がすてきな柳、施設課のムードメーカー近藤、堅実さでは誰にも負けない星野(ちょっと頑固)、お調子者の野口で日々業務を行っています。



また、B、C館の清掃業務は業者に委託しており、その管理を施設課で行っています。施設課の目標は、「安全で清潔な建物の継続的な維持管理」を目指しています。そして、職員、患者様から必要とされる部署、お声をかけて頂きやすい部署になるよう日々仕事をしていきたいと考えています。幸いにも、みなさんに気軽にお声をかけていただくことが多く、スタッフも日々の仕事に「やりがい」を感じているんじゃないかと思えます。(ちょっと自己満足?) これからもおじさんず3、おばさんず2は院内の戦場へ体力の続く限りがんばっていきたく思います。

施設課 野口 昭

ました。日々追われていると、入職した頃の希望や期待に満ち溢れていた新鮮な気持ちを忘れ、時間が過ぎていくように思います。1年に1回のこの時期に初心に帰り、気持ちも新たに進んでいきたいものです。

今年度も皆さんに楽しんで頂ける広報誌にしていきたいと思いますので、よろしく願います。(M.A)



通所 リハビリテーション

当院では、平成18年10月より～優しい介護・楽しいリハビリ～をモ

ットーに通所リハビリテーションを開設しました。介護保険で要支援又は要介護認定を受けられた方を対象に、午後の半日をマシーントレーニング※・個別リハビリ・自主トレーニングなどで過ごして頂いています。

を一部変更し、下記のようなプログラムで、より多くの利用者様の

ニーズに応えていけるようにしていきたいと思ひます。



※マシーントレーニングについて

高齢者の介護予防・介助軽減・自立支援の為の手法として考案され、スポーツジムなどで行う筋力トレーニングとは異なり、軽い負荷「痛みの出ない範囲とし、楽に行えるレベル」で反復運動を行います。

安定した姿勢で、加齢に伴い使いにくくなった筋肉や神経を、再び動かしやすくすることを目的としています。又、脳血管障害などの慢性期の効果的なリハビリとして注目され、動作の衰え・活動の低下などの改善が効果として挙げられ、日常生活動作を行いやすく充実した生活を送る為のリハビリテーションの手法です。

現在、男性21名・女性13名の利用者様がいらっしゃいます。週1～3回ご利用され個人のペースに合わせ、5種類のマシンやエアロバイクを行い、又個別での療法が必要な方にはPT・OT・STの専門療法士が個別リハビリも実施しています。

利用者様も、皆さんで行っていることがお互いの励みになっているようで、おやつ時間などもあり、スタッフと共に楽しく会話が弾んでいます。

尚、4月からはスタッフも増員となり、より充実したリハビリを提供出来るよう内容

共和会理念

『優しい医療・楽しい職場』

私たちが目指す『優しい医療』とは!

- 患者様に安心と満足を提供する医療
- 良質且つ効率的な医療の提供
- 患者様へのサービスの充実

私たちが目指す『楽しい職場』とは!

- 毎日の出勤が楽しくなる職場
- 職員のレベルアップと仕事の充実が感じられる職場
- 職員の満足が患者様へ反映される職場

基本方針

～当院をご利用の皆様へ～

わたしたちは、利用者の皆様が安全かつ納得のいく医療を受けていただくことを目指し、それぞれの尊厳を大切に、思いやりのある医療を提供します。さらに、地域関係機関との密接な関係を保ち、地域の医療水準の向上に努めます。

- 1.あなたは、個人的な背景の違いや病気の性質などにかかわらず、必要な医療を受けることができます。
- 2.あなたは、医療の内容、その危険性および回復の可能性についてあなたが理解できる言葉で説明を受け、それを十分納得して同意したのちに、医療を受けることができます。ただし、必要に応じて主治医の判断によってご家族、代理の方にお話をする場合もあります。
- 3.あなたは、今受けている治療、処置、検査、看護・介護、食事その他についてご自分の希望を申し出ることが出来ます。また、他の医療機関に転院したい場合は、必要な情報を提供致します。
- 4.あなたの医療上の個人情報は保護されます。
- 5.あなたの社会でよりよい生活が提供されるよう、地域関係機関との連携を図ります。

病院長 榎本 和



特定医療法人 共和会 **共和病院**

愛知県大府市梶田町2-123

TEL.0562-46-2222(代)
URL http://www.kyowa.or.jp/

現行

- 13:00～13:30ーバイタルチェック・テレビ体操
- 13:30～15:45ーマシン・個別リハ・自主トレ
- 15:45～16:00ーおやつ
- 16:00～16:15ー帰りの準備

新プログラム

バイタルチェック・テレビ体操の後、マシン組と個別リハビリ・自主トレーニング2班に分かれ行います。

- 13:00～13:40ーバイタルチェック・テレビ体操
- 13:40～14:40ーマシン組
- 14:40～15:00ーおやつ
- 15:00～16:00ー個別リハ・自主トレ
- 16:00～16:15ー帰りの準備

詳しくはリハビリテーションセンターまでご連絡ください。

TEL・FAX 0562-48-1916

俳句コーナー

鐘つくば 銀杏散るなり

建長寺

漱石

加藤邦之助

子規が松山に帰郷し松山中学校の漱石の所へころがり込みその数ヶ月後東京へ帰った。

その間、毎回俳句の運座に参加、子規は漱石の弟子であった。またその間の食事も小遣いも全部借り帰京の運賃もだしてもらった。帰りに奈良へ行き散財して金も運賃もなくなりまたぞろ漱石に金を催促した。これほどに二人は生涯の親友であった。「建長寺」の句はその頃の句で、子規は漱石に感謝して二人の好きな柿を思い出して作った句が有名な「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」である。

二人で一緒に法隆寺で柿を食べたらと言う思いを残している。またこの句の二つは同じ様な姿をしていて子規の漱石への気持ちが良いでている。建長寺の句を子規は知っていたので漱石はこの句を感謝の挨拶に使ったと思われる。漱石は、余は一友を得たり、その喜びを知るべしなり。二人は生涯の親友であった。

この度、加藤邦之助の最終原稿が見つかりましたので寄稿いたします。父、加藤邦之助の「漱石を想う」最終回となります。長い間、皆様にご愛読頂きありがとうございました。父に代りまして御礼申し上げます。特定医療法人共和会 理事長 加藤 仁